

三島 日本大学

同窓会々報

第 17 号

昭和 62 年 6 月 12 日
静岡県三島市文教町 2
日本大学三島同窓会発行



学園開設四十周年を記念しての 時計塔完成

日本大学三島学園は、昭和 21 年 6 月 15 日に三島予科として発足以来、61 年度で四十周年を迎えたわけであり、大学は 61 年 11 月 1 日、西村同窓会長も招かれての記念式典が盛大に挙行された。

三島同窓会としては、三十周年記念の時にはグラランドピアノを寄贈したが、今回は時計塔一式並びに桜の苗木 10 本を贈ることになり、61 年 11 月 3 日、記念館における総会のあと、贈呈式がもたれ、西村美枝子同窓会長から学園長の藏並省自先生に目録が手渡されたわけであるが、その後大学は年度内完成を目ざして工事を進められ、去る 62 年 1 月 8 日に完成したものである。

この日、学園長の藏並先生を始めとする役職の先生方、同窓会か



らは西村美枝子会長、西村満男前会長、遠藤逸雄副会長のほか学内幹事が参列して、時計のスイッチオンを記念してのテープカットが行われた。

桜の苗木は、学園内にある桜のうち樹齢の古いものが多くあり、順次計画的に植樹していかなければならないと思われるが、三島同窓会としては、その一助にと贈ったものであり、植える時期と場所については、大学管財課に一任したものである。



学園讃歌出来上がる

学園開設四十周年を記念しての歌を 60 年度と 61 年度に募集してきたが、この程「わが母校、日本大学」という学園讃歌が出来上がった。原曲は E・エルガー、作詞・編曲は西 正郎氏。

この歌は、62 年度に発行される「学園歌集」に載り、テープはテープ代実費頒布の形で、校歌等も入れてつくりたいと思っている。

日本大学三島予科

学泉寮同窓会

座談会

日本大学三島予科学泉寮同窓会は、寮が昭和24年に閉寮されてから、実に38年ぶりに計画がもたれたる昭和62年3月20日、銀座の京橋会館に於て開催された。

寮は現在の合宿所あたりに、兵舎跡を利用して五棟に分かれ存在していた。寮は自治寮で総ての事を寮生が行い、例えば炊事人も寮で雇用していた。当初は、

南寮 1号室、44名。
而寮 10号室、38名。
魏寮 18号室、21名。
北寮 22号室、29名。
瀧寮 32号室、52名。
当日の出席者は、
昭和20年入学 進（南寮、1号室）
豊田 進（南寮、1号室）
昭和21年入学 池上 昭三（南寮、8号室）
佐々木康正（南寮、3号室）
昭和22年入学 長田 涉（北寮、23号室）
勝村 一男（南寮、6号室）
小林 昭雄（瀧寮、37号室）
後藤 広（瀧寮、19号室）
佐藤 正英（南寮、3号室）
杉浦 繁二（北寮、31号室）
鈴木 尚之（瀧寮、48号室）
坪田 正治（旧中寮、19号室）
豊田 助一（魏寮、20号室）

お待たせいたしました。
皆様ご多用の処、ご案内を差しあ



山内 茂（司会）（昭和22年入学）

げましたら、30名近くのご賛同を得まして、今日お集まりを願ったわけでございます。
私昭和22年入学の、あまり顔が変わっておられない、南寮四号室におりました、山内でございます。
今日は拙うございますが、司会を務めさせていただきます。

我々が青春を謳歌し、ある時は真理の探究の為に討論をして、朝の白むのを忘れたり、ある時にはしじまを破って、人を驚かせるようなストームをしました。学泉寮は、新学制によりまして消え失せてしまい、昭和24年に無くなりましてから、38年を経過したわけでございます。

その間に、学泉寮の夢というものは、我々の脳裏の中に去来するだけとなつてしまつたわけでございます。その栄光と伝統は、今まさに消えなつてしまつてしまつただけども、この栄光と伝統をどうするか、何かの形に残したいという願いがありました。実は日本大学三島同窓会の方からお骨折りを頂きましてこの学泉寮の栄光をいつまでも続けるには、やはり寮生の集いが必要なんではないかという示唆もあり、又、三島同窓会長の西村さん（旧姓長谷川さん）のお骨折りによりまして、今日のような会を催すことが出来たわけでございます。

この大切な機会を得ましたことを幸いいたしまして、本席はひとつあの若き日の「友の憂いに我は泣き、我が喜びに友もまた」感激の一夜を皆さんと共に分かち合いたい、思っております。どうぞ最後まで青春のいわゆる、あの怒濤の時代を思い浮かべて、青春に帰って頂きたいと思ひます。
では、只今から日大学泉寮同窓会を始めたいと思ひます。で、始めるにあたりまして、寮監をはじめ物故者が多々出ております。寮監から申し上げますと、初代の寮監・上野親夫先生、二代の安藤公平先生、玉津徳太郎先生それから服部勤一先生、寮監をされた四人の先生方には、もはや物故されて我々と世界を別にしてるわけでございます。各寮監並びに寮生の中でも、私の一期上の上西さんを始めとして、何人かの方が物故されていらつしやいます。会を始めにあたりまして、寮監並びに諸先輩に対しまして、黙禱を捧げたいと思ひます。（黙禱）
ありがとうございます。
それでは、昭和22年度全寮総代豊田 進氏からご挨拶を頂きたいと思ひます。

豊田 進（昭和20年入学）



ご指名によりまして最初に挨拶をさせていただきます。本日はご多忙の処、皆様お集まり頂きましてありがとうございます。この会の企画その他に於いて、中浜さん、山内さんのご努力を頂いたこと、御礼申し上げます。

考えてみますと早いもので、已に40年が経っているわけで、敗戦後の混乱の中に私共は三島の地に集まりまして、食糧事情の甚だ悪い中でもともに勉学に勤しんだ仲間として、私も今、昔を思い出しているわけでございます。
その中で何と云つても食ひ物のことが、やはり印象に残っております。



寮 応 援 団

ます。澱粉雑炊といいますが、あるいは大根にご飯がくっついていような大根飯、そういったものが主だった学泉寮で、我々は生活していました。

又、ある時は腹の虫に負けまして、夜陰に紛れて調達に出たこともあり、ある時には三嶋大社の鯉が少なくなった、なんていう話も聞きました。荒々しい戦争あるいは勤労動員という所から三嶋の地に行きまして、まず三嶋の女学生、洋裁学校の生徒が眩しかったという記憶もあります。

そして、一年位しますと本日ここに居られます西村さん始め、日大にも女子学生が数人入ってきたわけでありまして。狼の中に小羊が入ってきたようでした。小羊がいないけれども、余りにも小羊が少ないので、却って大切にされたんじゃないかと、思っているわけでございます。

それから、今思えば生真面目過ぎる程、お互いが人生を語り哲学を論じ合いました。勿論本も買いました。そして少しは読んだわけです。岩波の本なら何でも欲しかった時代でありました。物不足の中ではありませんけれども、寮祭も行いまして若さを発散させました。又、シーツを幟旗に仕立て、三嶋の街を練り歩いた記憶も蘇ってくるわけでございます。

そのように見ますと、三嶋の街は、あの当時は日大の街であったという感が強くするわけであります。

それから学園紛争に入りまして現在の安保だとか新左翼のような

陰湿なものでなくて、非常に若さを発揮したあるいは爆発させた、明るい闘争であったかと私は推察するわけでございます。そして、この紛争を糧にしてその後を發展させた人、あるいは傷ついた人、様々であったことだろうと私は思うわけではあります。

私も今年60歳になりますので、現在の職場を離れるつもりであります。女房は盛んに働いて、やたらに私の尻を叩いているわけです。まあ「亭主元気で留守がいい」というのが、身近に感じられてきたわけでありまして。

それから私の造語ですが「澱・根の友」(澱粉と大根)がここに集まり、私は幸せを感じている次第でございます。今夕はゆつくりと昔を語り、そしてその後のご発展の程を話し合って、楽しいひと時を過ごしたいと、かように思っております。

又、最後に若山牧水の歌を詠ませて頂きまして私の挨拶を終ります。「いま来よと云ひ告げやはは為し難き事をし来む友をしぞおもふ」(拍手)

司会 どうもありがとうございます。続きまして祝辞を頂戴したいと思ひます。日本大学三島同窓会長 西村美枝子氏から、どうぞ。

西村美枝子(昭和22年入学)



お忙がしい処お集まりいただき

ありがとうございます。何十年も経つてこうやって皆さんにお目にかかれることは、本当に嬉しいことだと思ひます。ラグビー部におりました長谷川です。

三嶋の学校もすごく変わりました。昔はちよちよと居た女の子達だったのに、今は女子学生が大変増えて、女の学校に迷い込んだのではないかと思う位でございます。私の中には大きな財産があるとすれば、それは日本大学三島で学んだことでございます。只今、同窓会長という役を仰せつかっておりますが、これは女の子が一人か二人という状態で大学を卒業した為に、皆さんが憶えていて下さるからでもあります。

この間の付属三嶋高校の野球部が、甲子園に行く等という時にはお前が呼び出し上手で、皆さんからお金を集めるのに、大変便利だとも云われました。

沢山の校友にお目にかかりますと、「僕は三島に行つて、女の人に初めて口をきいたのが貴女だった」と云つて、「貴女の中に僕達の青春があるから、貴女は長生きして下さい。」こう仰有つて下さる方がありまして、非常にそれは嬉しいことだと思ひます。

一夜にして彼女は出来ても、一夜にして友達というものは出来な。これ以上増えることのない、大事な友達皆さん、ご健康に留意していただき日大三島の一層のご後援も頂戴していききたいと思ひます。よろしく願ひいたします。(今でも美人だぞ！)(拍手)

司会 続いて来賓をご紹介申し上げます。現在、三島同窓会副会長をしておられる、見上勇逸さんです。新制の五期でございますが、寮歌の継承者としての才能の持主です。(拍手)

続いて三島同窓会事務局長をしておられる、角田義廣さんをご紹介いたします。30年の入学で、現在三嶋の大学の方で学生課長をやつており、今日はこの学泉寮同窓会の模様を記録し、三島同窓会々報にも載せたい、ということで三島からわざわざおいで頂いております。ご紹介申し上げます。(拍手)

続いてもう一人、三島同窓会東京地区世話役として、四期の大井徹也さんです。現在、三嶋のラグビー部のコーチとしてボランティア活動で三島まで通つていらつしやつて、後輩の指導にあたつておられる方です。どうぞお見知りおき願ひます。(拍手)

司会 ここで乾杯をいたしたいと思ひますが、第三期の全寮総代の長田 渉氏の音頭で乾杯いたしたいと思ひます。

長田 渉(昭和22年入学)



ご指名を頂戴いたしましたので僭越ではありますが、音頭をとらせて頂きます。後程悪口雑言まじえてのご挨拶をさせていただきますが、皆様40年のしかも初めての再会と云つても過言ではないと思ひます。お互い非常に元気でご健勝に發展しておられる様子を目のあたりに見て、今日私も大変に楽しみにこの会に出席させて頂きました。どうぞひとつご唱和をお願い申し上げます。

皆様の今日までのご健康と更に今後のご発展をお祈りして、かつ又、日大三島予科学泉寮ならびに日本大学三島同窓会の発展を心から祝い申し上げて、乾杯したいと思います。おめでとうございます。(拍手)



マントスタイル

司会 ここで祝電を披露いたしました。(一)「もと美少年の皆様にお会いしたいと張り切って血圧があがったようです。次の機会を楽しみにご盛会を祈ります。」廣瀬章代さんから。

なお、廣瀬さんからは次の便りが届いております。

― 当時は、学生の皆さんとも年齢の差がなかったから、一緒に何かやろうと張り切っていたことが、一番心に残っていて楽しかった。私は今、庶務課長補佐。後輩の男性職員は夫々管理職となって張り切っていて、精神的にも成長してほしいと思っている。忘れないで、私にいつも声をかけて下さる皆さんに感謝し乍ら。―

(旧姓・橘さんと云い廣瀬さんは三島開設以来事務所にお勤めで、往時の学泉寮を知っている貴重な学校関係者のお一人です。)

(二)「学泉寮同窓会の盛会を祝し、皆様のご発展とご健勝を祈念し、諸兄の力強いご支援に感謝申し上げます。」日本大学三島体育奨励会会長高田菊平氏から。

この辺で、池上先輩から近況報告等お聞かせ願います。

池上昭三(昭和21年入学)



私は26年に経済学部を卒業して税理士になり、現在は吾妻橋会計事務所を経営しております。今は

珍しくありませんが、時代に先んじてコンピュータを導入し、病院・歯科医その他多業種の仕事を受けております。校友のご支援もありまして、この道一すじにやっ参りましたので、税務のご相談にはどうぞ遠慮なく。お役に立ち度いと思っております。

今は亡き種房君が、長い間同窓会を世話してくれたおかげで、色々な会合に出たり、海外旅行も何度か一緒に楽しく過ごした思い出があります。今日の学泉寮会に彼が居ないのが大変残念です。

これからの時々この様に会う機会を作って下さい。今日はとても嬉しいです。(拍手)

佐々木康正(昭和21年入学)



私は背が大きくて(実は一番小さい)目立つたほうですが、よその部屋で炊く飯盒からの匂いで、スプーンと塩を持って駆け出したのですが、ただ、鶏は私はやっていないですよ。(陰の声「犬をやった」)よく芋と豆は抜きに行きましたね。どうにもお腹が空いたまらなくて。

今は草加に住んでいますけど、それまでは神田で工具店に30年間勤めまして、現在休業中です。よろしく願います。

学部は経済ですが、午前中は麻

雀、午後は空手部の練習で、授業は卒業までに十時間位いしか出ていませんね。まあ良く卒業させていただけたと思って居ります。いろ／＼思い出はありますけど、次の方に。(拍手)

妹川和夫(昭和23年入学)



私は瀧寮に居りまして、中浜先輩と同室で、色々教わったと思います。毎週とまではいかなかったが、田舎から米をかついできまして、部屋の電熱器で当時電圧が低く仲々熱くならず、だいたい飯盒で炊くの約一時間、出来上がる頃になるとどこからともなく、塩とスプーンを持って先輩が五、六人、部屋にドヤドヤと入ってきて食べられてしまう為、3回から4回炊きませんと、自分の口にありつけないと記憶しています。そろそろ夜が明ける頃、飯盒で炊いた飯を腹いっぱい食べた、というわけ

です。

昭和二十八年工学部電気工学科卒業後、ユニバックという会社に入社、証券取引所や野村証券等日本に於けるコンピュータの揺籃期よりコンピュータと懸わり合っている、昭和33年から34年にかけて、アメリカにコンピュータの技術習得のため勉強に参りました。曲りなりに、日本のコンピュータ

―の黎明期の基礎を築いたろうと、思っております。

現在もユニバックに居り、これからあと数年ですけれども、頑張っていきたいと思えます。(拍手)

太田九州男(昭和22年入学)



22年から寮に入りました。寮生活で想い出すことは田舎に休みの度に帰る時に布団を必ずチツキで送って、帰りに布団の中に米を2斗、自分でリュックサックに2斗背負って帰る。軍隊から持ちかえった飯盒で毎日炊いて、薪が無いので羽目板をぶっ壊して薪にしました。

全般に食糧が足りなくて、境目を乗り越えて、屋根裏から飛び込んでくる連中は数知れず、だいたいあれで栄養失調が助かった人が、居るのではないかと思います。

週に一回、郵便で送れる分の重量は、米1.5kgだったと思いますが、毎週田舎から送らせました。田舎が佐賀の隣の米どころだったものだから。

寮の昼飯で思い出すのは、「今日の飯は何だ」というと、蛙の玉子、という言葉が返ってくるんです。これは、澱粉でつくった水とんなんですが、水とんを見ますと蛙の玉子みたいに必ず透き通ってくる

んです。「蛙の玉子」という愛称が付きまして、これは大低昼には出ていたように思います。

真夜中には、腹が空いて寮の近所では問題になるので、土狩の方にまでスコップ担いで、リュックサック背負って薩摩芋アタックに行つたことを憶えています。そういうことで、食糧事情が大変悪く、非常に苦しい思いをいたしました。

子科を出まして、電気科の方にすすみ、日本電子に技術系で入りましたが、オイルショックの後に会社をやめまして、現在、別会社の製造部長をしております。住いは八王子の方に居ります。よろしく願います。(拍手)

甲木康夫(昭和23年入学)



今日は久しぶりに懐かしい皆様方とお逢い出来て、非常に喜んで



ストーム

おります。私は北寮に入りましたが、最初の日、夜中にバケツ等を打ち鳴らし、上級生が部屋へなだれ込み、水などぶつ掛けられ、叩き起こされたのには吃驚しました。歓迎ストームだったのです。先生方も一緒にファイアストームをやり楽しい思い出でした。

北寮の裏は玉津先生や安藤先生服部先生方が住んでおられ、小さい女の子さんが良く遊びに来ていました。寮ではことある毎にストームをやり、町へ繰り出し、当時の三島の町は予科生のバンカラ一色と云う感じでした。又、友人達の帰省往復の際は、三島駅でストームをやり沼津駅まで送り迎えに行ったのですが、三島駅では全員「オス」の一言で只乗りでした。箱根遠征・寮祭・運動会等楽しいことがありましたが、最後は学生運動でばらばらになり残念でした。

又、食事の思い出も沢山あります。食堂は校庭の南側にあり、大根入り御飯、雑炊、水とん、さつま芋、海藻ソーメン等が常食でした。豚もつ入りカレーライス、海藻ソーメンは印象に残っており、海藻ソーメンは少しも美味しくなかった。さつま芋は北海道の連中が珍しがるので、米と交換したりして彼等の部屋へ良く飯を食いつた。御馳走は白米の御飯でした。三、四人で連座になって飯盒の飯をスプーンでつき食べると必ずそのうち人数が増えるのです。お菜は醤油か味噌・福神漬で、佃煮は高級品でした。ある時、夜、米屋の前に有ったさつま芋の俵を

何人かで担いで来たことがあったが、あつと云う間に失くなりまた。一番食糧難の時代でした。

しかし、夏休み前夜や帰校した最初の夜等、ラストコンパ、スタートコンパと称し、酒が出て夜遅くまでファイアストームをやりましたが、反面長閑な若き良き青春時代でありました。(拍手)

杉山吉房 (昭和23年入学)



私は昭和23年春希望に燃えて、九州は福岡県立若松中学校より、日本大学三島予科文科に入学した。入学と同時に学泉寮に入寮し、南寮に寄宿することになった。室長は女子聖学院短大教授の山内茂さんである。当時は終戦直後の苦難な時代で、衣食住すべてにこと欠いていた。まずは、食べることに追われていた。常に空腹であった。すき腹に、「不美味ものなし」と云う如く、身体が健康であれば、どんなものでも美味しくいただけるものである。又心もしかり、観るもの、聞くもの、皆ことごとく血となり肉となった。物質的貧しさのなかに、精神的豊かさを知り得たことは、私にとって貴重な体験であった。

学泉寮と云えば、兵舎の跡の侘住宅であったが、私にとっては、金殿玉楼にもました思い出多き場

であった。ないないずくめの時代であったが、寮生一同不思議な連帯感で結ばれ、互に助け合い、励ましあった。夜を徹して政治・経済・人生観と各論にわたり語り明かし、よく哲学書を読んだものである。

学泉寮時代の一年間は、私の人生に、尊い多くの教訓を与えてくれた。当時の寮の食事は配給制で腹三分程度しか支給されなかった。食事の内容は、海そう麺・水団(小麦粉を水にこねて、汁に落として煮たもの)・大豆粕・薩摩芋が主食であった。腹三分では、血気さかなん吾々には満足出来ず、他から調達せざるを得なかった。

当時の食糧調達方法であるが、各室ごとにアタック隊が編成され、秋ともなれば、近くの田圃に、夜な夜な稲刈りに出掛けた訳ですが、稲刈りと云えば、鎌をもって行くことを想像されますが、稲刈りではなく稲穂刈り、即ち籾取りの事である。小道具は竹櫛を使用した。籾を持ち帰り、一週間程天日乾燥の上、一升瓶につめ、寮生交替で棒で突っ突き、その後団扇で扇ぎ籾殻を取り除く作業をする。玄米を再度棒で突き、米の飯にやっとなりつく。このような原始的な仕事を重ねた。この時ほど農作業の尊さを、いやと云う程感じた事はない。

又、学校裏の原木部落で、澱粉工場のアルバイト、土木作業員等色々なアルバイトをし、身体労働の限界に挑戦したものである。当時、予科生節の歌詞に、
「蚤と虱の 学泉寮 虱とつても

殺しやせぬ 未来の博士は情ある」
予科 ヨーイ ヨーイ

当時の寮生には、血を分けた虱にまで情けをかけ、痒い思いまでして殺さなかった純粋な気持をもっていた。

「やぶれ着物を纏うていてもいつも 心は 錦なり」

昭和29年経済学部を卒業し、同時に大成建設株式会社に入社した。現場を数十カ所、広島・東京等各所に勤務して来た。建設現場では、数多くの苦境に遭遇したが、その都度、逆境にもめげず頑張り得たのも、学生時代の教訓が、私を支えてくれた。

「断じて行けば、鬼神も裂く」と云うが、常に勇猛果敢に攻めて来た。

一昨年退職する前五カ年間は、本社不動産部長の重責を全うした。退職後叔父の事業を引継ぎ、現在、赤羽冶金株式会社経営にたずさわっている。当社は、非鉄合金製造業(電熱線、ニクロム線)として昭和二年創業の老舗である。今年で満六十周年を迎える記念すべき年でもある。AYKのブランドで、世界的にも知られた会社であることをお伝えする。

これからも、大いに頑張るつもりです。終わりに、日大三島同窓生の御多幸を祈る。(拍手)

瀧源吉昭 (昭和23年入学)



やあ暫らく！四十年振りかな！と先輩が話をしているのを先程、会場内で聞きましたが、私は三十九年前、昭和23年予科理科D組に入学しました瀧源です。

生まれは東京の五反田でして、ここで育ちましたので、学泉寮へ入寮して広大な山野を眺め、特に富士山を朝に夕に眺める生活には感激する事が多かったです。入寮してから行われたファイアストームや大食堂でのコンパは記憶に新たなものがあります。原語でマルセーエズを唄った先生の熱意は忘れる事が出来ません。

学泉寮の行事として行われた素晴らしい箱根登山の企画に参加され、運営された人がこの中にいます。今日、ここで出会い出来た事は私の望外の喜びであります。

あの英知に溢れた企画は、私をして函南より登山を始めさせ、山道を登らしめたと云うだけではなく、一生の良い思い出となっております。

秋になりますと、学泉寮の近くの畑にもさつまいもが実っております。当時は食糧事情が悪く、街へ出て食べ物を買えない時代でしたので、或る夜、寮友と一緒に鉄道学校の敷地内にあった甘藷畑へ出掛けました。私共に気がつ

いたのか、サーチライトであちらこちらへと照らし出しました。光を照らされそうになったので、私は芋畑へ身を伏せました。少しでしたが無断にて芋を頂戴して帰ろうとしましたが、掘り起こしっ放しで帰るに忍びず、芋の根を元の様に土の中に埋め戻して帰りました。当時の私には正義の一かけらがあったのだと思っています。

やがて学園紛争が起こり、授業が中断する日もありました。これは学園内での政治活動だと思いましたが、時、あたかも新制大学への移行時でした。私は政治活動は好まないもので、学生部長の所へ行きまして、世田谷教養部へ転籍させて貰える様に届出をしました。これが受理されて、私は世田谷教養部から理工学部へと進み、機械工学科を卒業しました。

現在は空調・冷凍・冷蔵の設計をやっております。簡単ですが、近況の報告に代えさせて戴きます。(拍手)

佐々木顕一(昭和23年入学)



23年入学の佐々木です。寮は南寮の九号室で同室者は影山さん、田元君がいて、田元君は帯広市長に、南寮の奥田君は三島市長になり、同期の出世頭です。

寮生活で思い出すのは、一体全

体我々は何カロリとっているのか知りたいと思って、一週間に食べた物の記録をとって、三島の保健所へ持って行ったことがあったんです。結果は一日1100〜1200カロリだったですね。これじゃあ栄養失調者が出て不思議ではなかったわけです。保健所の先生が同情してくれましたね。屠殺場のモツを特別にくれるんですよ。殺すのを見ながら待っていると、ホースで腹の中に水を入れてズルッと出した暖かい血だらけのを、バケツに入れてくれるんです。それから自転車であちこちよくもらいにいったんです。卒業後しばらくその匂いが鼻について、肉の顔を見るのもいやだったですね。

学科は建築の方へ進み、大学を出てからは竹中工務店に入り、現在は一の関で、株式会社佐々木組を経営しております。昨年は本社ビルも完成して、皆様がいらっしゃっても、見苦しくない程度に出来上りましたので、是非お立ち寄り下さい。

出身は岩手なんですけど、どう間違ったのか現在、日本大学校友会岩手県支部の支部長に担ぎ上げられまして、母校のためにも精一杯頑張らせてもらっています。何かこうじつとしてるのが嫌いで、性に合っているのかも知れません。(拍手)

(佐々木氏は翌々日の二十二日に急逝されました。合掌)

松本秀雄(昭和23年入学)



魏寮21号室の松本でございます。同室者は中塩さん。現在ささやかな建設会社を経営しております。

寮当時思い出すのは、寮長の後藤さんと、三嶋大社の明神さんの鯉の夜釣りに行きまして、これがものすごい手応えがあつて、釣れたのが赤い鯉。その一匹を持って夢中で寮へ帰ろうとしたら、「二匹や二匹でオタオタするな、もっとやれ」って云うんですね。ところが冬なもんですから、鯉が懐の中へ入れても、バタバタ暴れて、とに角必死の思いで、持ち帰ったんですけどね。

赤い鯉っていうのは、食べると苦いんですね。塩もないし、ナタで切って鍋でぐつぐつ煮て食べるんですが、ニガイのを除くとあんな美味しいものはなかったですね。

ところが、つらつら思うに、大社のバチが今もってあたっているんじゃないかと思うんですね。後藤さんに四、五年前に岡山でお会いしまして、その話が出て、いや俺もそう思っている。実はその交通事故で生きるか死ぬかの災難に遭って、お前も気を付けろ、と。

まあ、そういうことで、とに角皆様方お元気なご尊顔を拝しましたことを、私は心から嬉しく思っ

ております。よろしくひとつお願い申し上げます。(拍手)

春野剛一(昭和22年入学)



九州から出て来まして、山内さんは中学時代の一年先輩でございます。私は三島の学泉寮に入寮いたしました。結構うまい物、先程から水とんやわかめスープ、そういうお話が出ましたが、学泉寮の賄をやっていたのが、当時の三島警察署の前にありました、三島食堂さんで、おばちゃん和娘さんも居りましたね。そう云う人達に私は水団等、一つ二つ多くもらったんじゃないか。(陰の声)娘をたらし込んだんです。

それからある時、もう夏時分になりました。中浜君もいい男なんですけど、ある場所から帰れず服部先生に金を持ってもらい下げに行つてもらったことがありました。

中浜君のお父さんが厳しい人で、三島駅にお迎えに上りました処、えらく怒鳴り飛ばされました。三島駅前の商店街の人達が吃驚していたんではないかと。その後、おやじさんと一度お会いしましたが、いいおやじさんでございました。

それから当時、勝村さん、豊田先輩、山内先輩が、弊衣破帽のマント等を着て、朴歯の下駄を履いて闊歩されていた姿がなつかしく

思っております。以上です。(拍手)

松林通文(昭和22年入学)



22年の理科入学です。と言いましても実は私は復員帰ります。中国各地を兵隊で歩いて予科に入つた時は22歳だったと思います。現在63歳でございます。

予科2年で新制大学に移行になり工業化学科に進みました。卒業後日本製鋼所に入りましたが、34年に石川島播磨重工の航空宇宙事業本部に移りました。そこではジェット・エンジンの製造にたずさわりました。また文科の親友であつた勝村君の弟君に会いました。世の中はせまいものだなあとつくづく思いました。

よく考えてみますと、四年前に59歳で石川島播磨重工を退職する



までの間、日本製鋼所では米軍の戦車や大砲の修理、石川島では戦艦のF-104やファントムのジェット・エンジンの製造等をやりました。学校を出てからずーっと兵器ばかりやって来た事になります。私は戦争は嫌いなんですけどね。

若い頃会社の旅行に行き宴会のあと一人になって、旅館の庭先の静かな所へ行き夜空を眺めていたら、自然に出てきた歌がありました、逍遙歌です。「嗚呼栄冠に涙あり」です。今この学園歌集をみていてその事を思い出したので、30年以上もわすれていましたが。

その頃何か落ち込んでいましたね。後でこの逍遙歌を皆さんと大いに歌ってみたいと思っています。食べ物ですが、私は割合恵まれておりました。家が千葉だったものですから、私がリュックサックを担いで帰ると、誰いうとはなしに集まって来て、せっかく担いで来た米も、一回で無くなってしまったものです。みんな腹がへっていたんですよ。

理科の親友に下枝君がいました。ある日、三島の街で彼に出会いました。日頃バンカラで、少々きかない彼がいやにスカッとしたセーターを着ているんです。どこかで見たおぼえのあるセーターだなあと思いました。「お前いいセーター着ているなあ」と云ったら「これお前のだよ」と。自分のものは他人のもの、他人のものは自分のもの、これがまあ、あの頃の若い時の楽しい生活でもありました。でも質に流れなくてよかったと思いました。

見上勇逸（昭和27年入学）



それから、あの時分寮で何人かの酒の配給を受けられる年齢の者が居まして、私も勿論その一人ですが、「配給の酒がなくなっちゃった。資格のあるものでその金を払ってくれ」と云って来た一部の寮生が居ました。見たこともない酒の代金なんて払えるかい、と云ったら、最後に三、四人で入って来て「どうしても払えねえか」と腕組みして居座るんで、「そんな乞食根性みたいな奴には、呉れてやらあ」と云って金を投げたら、怒ってバツと札を二つに切っちゃってね。そこで私が「貴様、いやしくも大日本帝国の紙幣を切つたな、外へ出ろ。伊達や酔狂で戦地で人殺しをならって来ちゃいねえぞ」と啖呵を切ったら真青になり、「お見それしました」なんて云いましてね。寮生の中にも少々よくないのもいましたね。

当時、私も兵隊帰りで元気もあつたんですね。それに中学時代柔道の選手もしていたので腕に自信もあつたのかな。また、三島病院の看護婦さんを寮にとめたとかどうとかで、いろいろありました。今、考えると本当に楽しい良い時期をあの学園で過ごしたのと思います。

ところで、私は現在勤務の会社を今月一杯で引退する事になっています。少しゆっくりして再スタートしたいと思っています。

（拍手）

専門というのはありがたいもので、大学から話があり、最初は横浜女子短期大学という新しい大学に参り、ここではどうも勉強することができないので、現在は女子

聖学院短期大学という所に勤めております。

入りましてから一年経たないうちに、学生部長という職を仰せつかっております。学生時代には、学生課長（部長）を大変悩ました生徒の一人であり、因果応報というが、今その役目を仰せつかって初めて初めて学生がこの職を悩ますというのは、こういう事だったんだなあ、という感を深くしている処でございます。

現在の学校はクリスチャン・スクールでございまして、キリスト教義に対しては非常に厳しい所で毎週礼拝に出て聖書を読み、讃美歌を歌っているという、昔と違つた皆さんからは想像もつかないような生活をいたしております。

（拍手）

中浜卓弥（昭和22年入学）



寮費 二十二年四月 三百六十円
二十三年四月 五百二十円
何れも三食付です。

寮の食事のメニューは、原則として朝食夕食とも芋がゴロンと二個、小さめの芋でしたら三個、それに岩塩の水とん汁、水とんの中味は、蛙の卵と称した高粱のダングで、箸でつまむと底にクタクと沈んでしまい、そのまま飲み込んで終了です。時たま「今日は飯だぞ」と寮生が食堂から帰

りに叫ぶ日は、芋飯の日です。その芋飯は、芋のまわりに飯粒がパラ／＼と付いて、今日思えばまさにダイエツトそのもので、その芋飯の美味が今もって懐かしく思い出されます。何故か芋飯の日はお菓子がガンモドキの煮付で、そのおいしさたるや何物にも比較するとは出来ません。

当時の平均的な一カ月の親からの送金は、千円から千五百円位でした。私は千円送ってもらい寮費を差引いた残りが小遣いで、その内からタバコ代、駅前の闇食堂で一皿十円の芋代等に使つてしまい、風呂代などはすべて学校のプールで済ませてしまふので、（もつとも冬はプールで済ませる訳にはいかず、町の風呂屋へ行きました）まことに今思えばよく病気になるなかつたと思います。

食糧調達は芋・葱・鶏で、私は芋・葱専門でした。芋畑荒しは真裸になってリュックサックを背負つて真夜中に芋畑に進入します。何故裸になるかと云うと第一服がよくれます。第二に芋畑の中を腹這いになって芋を盗みに行くので、誠に都合なのです。両手が芋のアクで真黒になって、翌日寮監の玉津先生に見つかつて、うんとお目玉頂戴しました。葱は夕方散歩しながら物色しておいて、夜になるといただいて電熱器で焼いて、味噌を付けて食べました。すべてタダなので誠に結構でした。（拍手）

西村美枝子（昭和22年入学）

あの頃の寮生は、わざわざ破いているのではないかと思う様な、今でしたらニューファッションと

いうのでしょいか、わかめのような
よれよれなのを着て、すぐく臭
かったけれど、お風呂に入ってた
んでしょいかね。

大学祭の仮装行列には、忘れも
しない山内さんが赤い長襦袢みた
いな着物を着て、シヤナリシヤナ
リと街にくり出したんですね。同
級生に山内さんを憶えている？と
聞くと、必ず皆さんが憶えている
と云うんですね。「あの髪の長い
女装した人でしょ」と。

私は自宅から通っていたせい
かお弁当を持って学校へ行きますと
オス・オス。これはどういうこと
かと云うと、箸とフォークを示し
てお弁当を持っていたら出せ、と
いうサインだったんです。で、「お
前の分を残してやったからな」と。
そういう処に何か含羞みがあった
んだらうと思います。ですから、
私はいつもドカ弁を持って行く様
にしてみました。

寮の生活がどうあったか、今、
この飽食の時代に想像もつかない
事が沢山あったんで、実際に皆さ
んが経験したことを記録に残して
おきたいな、と思います。アルバ
イトもいろいろで、「キャンデー、
キャンデー」と云って沼津駅等でア
イスキャンデーを売っていたのを
よく憶えています。

長田 渉——あの頃のキャンデー
は、紙に包んでいたもので、その
紙が粗悪だからよく壊れるわけで
壊れた証拠を持って行くと、また
新しいのと替えてくれたんで、そ
こにつけ込んで紙をち切って、こ
けたと云って持って行くとそっく
り換金してくれた。その分が余様

になった。又発車間際では、釣銭
を渡さなかった。

西村美枝子——このほかに澱粉工
場へ行ったとか、土方をやったと
か、本当に吃驚りしちゃったのは
米軍婦人部隊に慰安夫に行ったと
いうのも聞きましたね。

中浜卓弥——それはね、東京の様
子は知っているんだけどね。
当時、今の主婦の友社や山の上ホ
テルの所が、接収されていて進駐
軍の駐屯地であり、婦人部隊が居
た。そこへ行くと一晩四千円くれ
るんだ。私も一遍行っただけだね。
食べ物はいろんな物を呉れて、腹
一杯になって眠くなってしまっ
た。それで部屋へ行くと、「ヘイ、
カモン」と云うんだよ。色っぽ
くないよ、本当に。

西村美枝子——箱根にも婦人部隊
が来ていて、「俺は行った」とい
う人が何人か居て、お名前はとも
角として、そこでは三千円だった
そうです。

杉山吉房——私やりましたよ。ス
ターキをくれてね。「カモン、ボ
ーイ」というわけで、すごかった
ですよ。(笑い)

大井徹也(昭和26年入学)



新制四期の大井と申します。26
年の四月、三島へ入学いたしましたし
て、先輩方のあたたかい遺産をう
け継がさせて頂きました。すでに

学泉寮は無く、伊豆長岡駅近くに
「長岡寮」というのがあって60、
70人の学生が生活していました。

私は三島市内の民間の下宿に放り
込まれて、その頃、下宿代は
朝・夕二食で三千円。親からの仕
送りが、月にだいたい六、七千円
位でした。

現在、ラグビー部のコーチとい
うことで、国際関係学部が出来ま
して七年になりますが、四年制学
部が出来たということで、運動部
も何とか力を入れようじゃないか
と、学校側の意向によりまして、
東京からノコノコでしゃばって行
っております。

国際関係学部四年制の学生とい
うのは、未だ八百、九百名位しか
居りませんので、あとは法・文理・
経済・商学部の一の学生と、女
子の短大生が千何百人その下に付
属の高等学校が出来ております。

当時、私も正門を入って「希
望の森」の前に芝生があつて、ラ
グビー部等とはぐろを巻いていま
したが、最近では校舎が増え様相が
変わっておりますが、40年とか45
年とかを期に、三島の地に偶には
お顔をお見せ頂けますよう、お願
いいたします後輩の挨拶といた
します。(拍手)

中島知之(昭和22年入学)



学泉寮の思い出は、一言で云え
ば食糧難の時代にお互いに助け合

いの精神で、他人のものは俺のも
の、俺のものも他人のものと言
う考え方があったからこそ、生活も
学問も出来たことでしょう。

夏休み、冬休みと寮生は帰省し、
上京のたびに大きな籐のトランク
に着替えのシャツや下着と一緒に
米や小麦(パンと交換出来た)等
を一杯つめて肩にかついで、食糧
統制下を潜り抜け意気揚々と三島
駅から寮に戻って来た。

そこで半月程度は米の飯にあり
つけた。当時の寮では「水とん」
や飯粒を数える程の「芋めし」、
最高の飯「オール麦飯」「コッペ
パン」の昼食、おかずは全然記憶にな
く、ただ腹一杯食べることが楽し
みであった。

シーズンとなると寮の裏は一面
の甘藷畑となり、小川が流れてお
り、校庭には燃料となる戦時中名
残りの厩舎があり、飯盒をもつて
夜半に出掛け、空腹を満たしたこ
とも度々あった。

シーズン以外は、三島駅前
の露店・土産物店で一皿10円の甘藷を
よく食べた。煙草も不足しており、
一本を数回に分けて吸いやりで指
先が常に黄色であった。

当時は白線帽にマント、朴の下
駄、久留米絨の着物と袴、又は詰
襟の学生服であり、予科祭の深夜
には寮のノボリと太鼓を先頭に寮
生が三島市内に繰り出し、スト
ームを組み、乱舞した。

今ふり返ると、終戦間もない苦
難の青春時代に共同と協調の大切
さを教えてくれた寮生活こそ、私
の人生に於ける忘れ難い一ページ
である。

坪田正治(昭和22年入学)



私は昭和22年に旧制中学を卒業
しまして、これが最後の旧制中学
で、出身が広島の呉市という所
で、白線帽に憧れて中学から
二人参りまして、三島予科にごや
つかりになりました。

その時、入寮した晩に新入生
迎大ストームがございまして、先
輩から色々とその晩に学泉寮の鉄
則を全部教えて頂いたような思い
出を持っております。あくる朝、
先輩達の顔を見ました時にもう同
じ一年生でも、私は生まれは昭和
5年3月で、同年生でも一番年が
若いわけです。その上当時は、旧
軍隊帰りの人も多く居て、年が五
つ位違った方がおられ、例えば私
の隣りの中島先輩とも二つ違いま
す。年が一番下だったことで年の
差のハンデキヤップを強く感じた
ことを憶えています。



二年間寮の生活を通じて、食糧難は本当にきびしいもので、三食食事はとっていたんですが、さつま芋の生活ばかりで、若かったんですが、水脚を患いまして、ほかにも罹った方が居たようです。食糧が尽き金が無くなると、皆んなその頃田舎に送金電報を打つわけですが、電文がふるっていいまして、「オヤジバンザイコメ（又はカネ）オクレ」とやるわけですが、友人が金に困って電報を打ったんですが、受信側が間違えて、「カカオクレ」になってしまつて、おやじが吃驚して飛んで来た、なんて事もありました。

学泉寮の生活というのは、先輩の色々なコチを受けまして、今から思いますと、本当に楽しい生活をさせて頂きました。

寮生活二年後、すぐ仕事に就きまして、現在私はアメリカの会社で、ヒューズ・エアクラフト・カンパニーという会社がございまして、航空宇宙産業界のハイテクの会社でございまして、ここに25年働きまして、日米の宇宙開発技術協力に橋渡しの役割をさせて頂きました。

私が関係した一つの宇宙開発プロジェクトで、現在NHKでいつも皆さんに顔馴染みだと思いが、気象衛星「ヒマワリ」という衛星がございまして、これは私共が日本電気と一緒に作ったプロジェクトですが、現在も将来の世界の気象観測衛星計画の発展のために役に立ちたいと日々頑張っています。（拍手）

豊田助一（昭和22年入学）



人生も60年近くなりますと、過去の思い出となることは、自分が一番苦労し、つらい思いをした時期ではないでしょうか。その意味で皆さんのお話が本当に私自身を昔に戻してくれたわけですが、話の中の芋泥棒も、三嶋大社の鯉つりも、若さで人の尻馬に乗ってやったものです。

東京に移り、学校を卒業し、勤めて今日まで三島で過ごした生活の数々を思い浮かべながら懐かしんでおります。卒業当時は就職難時代であり、運よく勤めた先も後一年で定年となります。幸い子供も巣立ちや々と楽な気持ちになっております。三島を離れて既に40年になりますが、三島を随分通過することはありまして、途中下車することがありませんでした。

昨年、偶々富士宮へ用があり、帰りに時間が余り下車したことがあります。駅前の建物の変化はありとすると街並は以前と同じだなと感じました。只々、私の記憶通り周囲の景色は美しく、水のきれいな、そして気候も温暖で住みよい場所だと思いました。

今このように三島時代の人と顔を会わせると、やはり念頭には過ぎ去った日々が浮かんでくるようでございます。よろしく願います。（拍手）

鈴木尚之（昭和22年入学）



鈴木です。比較的地味な存在でしたから、憶えていらつしやらない方も多いんじゃないかと思いますが、私のほうは先程からお話を伺っていて、ここにいらつしやる半数ぐらいの方々の当時の顔が徐々に浮かんで、今、たいへん懐かしい思いで一杯です。

食べるものの全くない辛い時代でしたが、飽食の時代と言われる今から振り返って見ますと、垣根越しに表の小さな川原に出て飯盒で炊いた御飯の美味しかったこと、後にも先にも塩を振りかけただけの、あの白い御飯が私の人生の中で一番の御馳走ではなかったろうかと、ふっと、そんな想いに浸ることもあるこの頃です。

寮長の豊田さん、居られますね。多分お忘れだと思いますが、私はこの人にひどく叱られたことがあります。田舎から妙な杯を持って来たときのことでした。その杯は極彩色で男女の秘事を描いたものでしたが、皆んなでそれをキャツキャツと騒いで廻し見をしているところへ豊田さんが現れて、『かようなものを持ち込むとは不届きである』といたくお叱りを受けたことがあります。私は非常に恥ずかしい思いにかられて、豊田さんの目の前でその杯を割ってしま

ましたが、思えばこれも純情を絵にかいたような青春時代の一頁として蘇って来ます。

長田くんのこと覚えています。ある日、私の部屋を訪れてこう言われました。「ばく、映画を見たいんですが、金を貸して下さい」私はその長田くんの気迫に吞まれて、ただか10円か20円のことだったと思いますが貸しました。そのお金が返ってこなかったの、いまだによく憶えている次第です。

私は二年で江古田の芸術学部に行き、卒業後、東映という会社に入りシナリオ・ライターの道を進みました。NHKでやりました『三姉妹』とか田宮二郎が出ました『白い巨塔』とか、映画では『飢餓海峡』とか『五番町夕霧楼』など沢山の脚本を書いて来ましたが、過去形ではなくまだこれからもバリバリやって行くつもりです。どうぞ皆さんもいつまでも若く頑張ってください。（拍手）

杉浦繁二（昭和22年入学）



私はごく平凡な人間だったんで、まあ山内君とか中浜君、彼等は悪党の標本みたいなもんでしたので、よく憶えております。

寮は22年一年間で沼津へ下宿することになるんですが、これは松林君の紹介だったかと思うんです

が。松林君というと、私よりも五年も先輩だということ、その時から大先輩という感じがしたんですが、呼ぶときは、「松林」と云っておりました。

そういったことで、三島で先程からお話しに出ておりますが、今では刑法に触れて、一応は警察の御厄介になるようなことを皆んなそれぞれ経験はしていると。私もアルバイト先の澱粉工場の澱粉をリュックサックに積めて持ってきたというような事もやっております。

三崎町では、法学部を出て銀行員になりました。今は、第二の生活ということ、勤めに出ております。今日の会合で、今後の生活に一番参考になると思ったのは、先程の1200カロリーのお話でして、我々の年代になると、あまりカロリーを取ってはいけな

い。そうすると、具体的な生活の指針としては、あの当時のものを食べていけば、健康維持が出来る。これはもう私、今日の一番の収穫として家に持って帰りたいと思っております。今後ともよろしく願います。（拍手）

*追記：三島時代の二年間へ小生は三年目は三崎町に移りました。は、諸兄の発言の通り、それはそれなりの青春の強烈なインパクトを与えた期間でした。当時の社会環境がもたらしたものと云えますが、食糧難・学生運動と、昭和23、24年の日本の戦後の混乱期の学生生活がどんなものであったか、又三島という土地の状況がどんなものであった

か、その一つの具体的な「コマ」が私達の寮生活であったと思います。

あたりまえのことですが、当日の諸兄弟の発言から、ゆっくりとはっきり想い起こしている次第です。まともりのない雑感となりましたが、学生会誌を読みながら学園の変遷と時代の流れ、そして自分の年を今更乍ら痛感した次第です。

後藤 広（昭和22年入学）



私、22年に学泉寮にお世話になりました、富士の後藤です。（18号室という陰の声あり）静岡の富士で寮生活というと、皆さん変だなあ、とお感じになられると思いますが、私の実家は東海道線「富士駅」から当時ですと、4時間位かかりました。そんなわけで、寮へ入れてもらった次第です。

寮に入っと思ひ出深いものは食事だったと思います。塩汁ではなく、じゃが芋が3つか4つそんな思いもありました。今、子供にも言うんですが、「なぜ残すんだ」と。

もう一つ、三島に新日本劇場というものがあって、北村和夫とか瀬川治なんか活躍していましたが、その大道具、小道具なんかを運ぶ手伝いをしたのを憶えて

おります。本当に思ひ出深い学泉寮でした。

学校を出るとすぐ、白河バルブという、私の叔父が始めた会社で、建設からやってきました。現在の三菱製紙白河工場、それから北上八戸の工場建設にたずさわりました。

その後郷里に戻って山男のような生活をしており、今一番不況のどん底にある林業をしております。空気はいいです。富士山にお出掛けの節は、是非お立ち寄り下さい。（拍手）

佐藤正英（昭和22年入学）



22年入学の佐藤です。実は寮は一年で退寮させられまして、閉寮までの間に退寮させられたのは、おそらく私がいいではなかったかと思ひます。（陰の声―その後、長田、山内も退寮させられた？）学泉寮時代の思ひ出として、皆さんから色々とお話しがしましたが、どれもこれも本当に懐かしい思ひ出ばかりです。

然し、誰からも当時の夜（？）の話しが余り出ないようでしたが、私はそっちの方に熱中しすぎて退寮させられた関係もあり、当時の夜の歓楽街の思ひ出をお話し致します。三島の赤線地帯は、駅の近くに通称五軒家（他分、女郎屋が

五軒あったからだと思う）と云うのがあり、実にその西の方に三軒家と云うのがあったと思います。

当時の日大の学生は割引がかりまして、私なんか顔が効いておりましたので、半額百円位だったと思ひます。女郎屋に行く時は、どうせ服を脱ぐわけですから、寮からどて姿のままで行くわけですね。赤線地帯に行きますと、お客の40〜50%が日大の学生だったと思ひます。そしてお目あての女性と遊ぶわけですが、その客が先客が入っていると、その客が終わる迄待つわけですが、それが何んとも佻しく、時計を見ながら、あの野郎、早く終れ！と心で叫びながら、いら／＼して待っていたものです。

それから、当時の三島にはエンゼルと云うダンスホールがあり、そのダンサーと親密になって、結構毎晩のように通ったのですが、何んとそのダンサーは暴力団の情婦だったのです。それを知らないで鼻の下を長くして踊っていたら、ある夜、その暴力団の彼氏が突然現われて、鉈を持って追いかけられ、深夜の三島の街を夢中で逃げ回った思ひ出があります。

その様なこともあり、結局、私は予科二年を終了と同時に世田谷予科に移りまして、皆さんより一年早く東京に出たようなわけですね。角、三島は私にとって本当に思ひ出深いところでありました。その後、私は、法学部を27年に卒業致しまして、海運の経営者団体である日本船主協会に就職、約三十三年勤務しましたが、去年健

康上の都合で役員を引退し、現在は、船員の病院とか保養所を営んでいる団体の役員をやっております。

お陰様で健康も徐々に回復しつつあり、優雅とまでは云えませんが、人並みの第二の人生を送っております。（拍手）

小林昭雄（昭和22年入学）



22年やはり南寮の二階に居りました。澱粉工場ではボーラーのアルバイトをやりました、たしか一日15円だったと思ひます。半月程働いて芋を買って山形へ土産に持って帰り、山形からは米を運んだのですが、制限があり、たしか二升しか持って来れなかったですね。同室に一年後輩の理科の奥田というのが北海道出身でバターをもつて来たので、それじゃ二人で食べようと寮の隅でコソコソと炊いて食べた、あの銀シャリとバターの味は一生忘れない味ですね。あの当時の苦しさと思えば何でも我慢できるなと思ひますね。

合格発表の後、故郷に錦を飾って帰省の折、上野駅で知り会った佐藤の帽子が古いので、先輩とまちがえたが入学の為三島へ戻ったら、寮も同じ室も同じでしたが、彼が退寮の時お前は友達甲斐がないと云われたのですが、その後

感化され、沼津へ行っても千本浜へ良く通いました。

現在、鎌倉信用金庫に勤めて三十五年になりますが、未だ本店営業部の第一線で活躍しており、且地元鎌倉中央ロータリークラブの会長も務めております。蔵並学園長にも時折卓話をお願いしております。

当時の舎監であり、又、担任でもありました、安藤先生、玉津先生の御冥福をお祈り致します。

勝村一男（昭和22年入学）



22年に入りました、勝村です。三島には22年4月から24年3月までおりましたが、この間はずっと学泉寮でした。学泉寮時代で今でも残っている思ひ出が三つあります。

一つは、食事のことですが、寮に入ってから一年経った時に、寮の生活部長として寮生全体の食事の面倒をみるという役目を仰せつかりました。当時は、現在の飽食時代には全く想像もつかない食糧難の時代で、食糧はすべてが配給制で、さつま芋や塩と菜葉が入った水団などが、主食代りという場合が多かった。また、砂糖が主食の代りに、かなり配給になったので、これを農家に行つて米と交換してもらうのに、色々な苦勞をし

たのを今でもはつきりと憶えております。

二つは、バンカラと寮歌です。当時の寮生は、終戦直後の混乱期で色々と困難な状況にありましたが、気宇壮大で敵衣破帽にマント掛けというバンカラ主義が、寮内を風靡しておりました。これを象徴するイベントが、寮生が帰省するたび毎に三島駅頭に繰り広げるストームで、大きな円陣を組んで寮歌を歌いながら乱舞する姿は、駅前の人々を驚かせたものでした。

三つは、学校での勉強のことで、私はどちらかというと、哲学とか人生論などに興味を持ち、こうした本を読みあさったり、夜遅くまで寮内で討論したりしていたことを、若き日の一駒として今でも懐かしく思っております。当時の学泉寮には、北は北海道から南は鹿児島までにかけて、全国的規模で人が集まり、お互いが裸の付き合いをし、しかも若さと夢がいっぱいに満ち満ちていました。私は本年60歳で還暦になりますが、今後も三島の学泉寮時代の若さと夢をもって頑張りたいと思っております。仕事は人間関係のコンサルタントをしております。

長田 渉（昭和22年入学）

22年の長田でございます。あれから学園紛争の時から、総代であった私を残留組が全部で私を首にしまして、退寮させられたわけです。

私が懐かしいと思うのは、今日来ていませんが、北条というのが居

ります。この男と食事を一緒にすると、必ず、俺はお前に米を一升貸している、ということは一升米を貸しているんだから、飲む時はお前の勘定で飲むぞ。いつもそう云って脅かされております。

そういうことで、当時の寮の時代も学園紛争で、袂を分かったような事になりましたけれども、あの当時、仲の良かったけれども、あだとか、大城だとか寺崎だとか、九州の連中で弊衣破帽で一番元気のよかったそういう友達が学部には進学出来なくて、別れていったこと。今にして思えば、大変残念でありますけれども、こういう連中が今後学泉寮の会であるから、出て来れるでしょうから、是非呼んで一回皆んなで語り合いたいと思っております。やはり思い出を大切に、精神的な土壌を豊かにして行きたい。

私は法学部に上りまして、卒業間際に胸の病気をやって、足かけ六年休学をいたしました。それから人生狂いに狂いまして、31歳にしてアラビア石油に入り宮仕えをしまして、それからこういう性格ですから、自分で事業をやらうかということ、海運会社を興し、この会社を15年位やり、まああの会社にまで成長しておったんですが、ほかの方でちょっと商売をやつて、これが蹟のもとになりまして、この会社を56年に終結いたしました。

現在、全商工業という会社をやつて、五年になります。まだ本当に苦労しておりますが、女房には逃げられる、家は無くなる、ゴル

フ会員権は、全部無くなるので、呻吟しております。何かいい仕事があったら教えて下さい。よろしく。（拍手）

豊田 進（昭和20年入学）

本日は、皆さまの懐かしいお話しを聞きながら、又、今後のご活躍などを望みまして、私自身も幸福な気持ちに漬っております。

先に長田さん、勝村さんが沼津でアイスクリーマー売りのアルバイトをしたと聞きましたが、その

因縁か怨念か知りませんが、現在アイスクリームのパッケージをつくる中小企業に勤めておりまして、ここに居られる皆さま方とは、世間に出れば、格が違いかも知れませんが、只三島の昔、若い時を過ごした思い出が心の糧に生きていくわけでございます。

本日は同窓会の皆さんもお出で下さり、いろいろ応援をして頂きましてありがとうございます。（拍手）

司会 どうもありがとうございます。実は遠大な計画がありまして、全国旧制高等学校予科寮歌祭が毎年開かれておりますが、皆さんのご賛同がありますならば、日本大学三島予科学泉寮として全国に駒をすすめたいと思っております。

（この後、学泉寮々歌等を歌って散会した。）



大社の鯉釣り

